

南大市 入羽 2015

第6号



H27 東アジア国際シンポジウム プレ・コラム

「ロード・オブ・ザ・コイン
— 弥生時代中国貨幣からみる交流 —」

大泉五十（原の辻遺跡出土）

長崎県埋蔵文化財センター

ロード・オブ・ザ・コイン — 弥生時代中国貨幣からみる交流 —

長崎県埋蔵文化財センター 東アジア考古学研究室 古澤 義久

この情報誌のタイトルは南北市糶（なんぼくしてき）といいます。この言葉は、3世紀に書かれた中国の歴史書『魏志倭人伝』に登場する言葉です。『魏志倭人伝』の対馬国に該当する部分には「良田なく、海物を食して自活し、船に乗りて南北に市糶す。」、一支国に該当する部分には「やや田地あり、田を耕せどもなお食するに足らず、また南北に市糶す。」という記述がみられます。市糶は「米を買い入れる」という意味ですので、南北から米を買っていたということになります。このように弥生時代には、交易が行われていたことが考えられますが、それでは、この交易はどのように行われていたのでしょうか？貨幣が用いられていたのでしょうか？

弥生時代の遺跡からはしばしば、当時の中国でつくられた貨幣が出土します。具体的には、今から約2100年前の前漢時代以降につくられた五銖銭や今から約2000年前の王莽新代につくられた大泉五十、貨泉、貨布などが出土しています。壱岐にある原の辻遺跡では、五銖銭、大泉五十、貨泉が出土しており、3種類が一つの遺跡から出土するのはとても珍しいことです。また、原の辻遺跡で出土した貨幣の枚数は16枚で、一つの弥生時代の遺跡から出土した量としては、全国で3番目に多い量です。原の辻遺跡以外にも長崎県域では対馬のシゲノダン遺跡、瀬のサエ遺跡、壱岐のカラカミ遺跡、車出遺跡など島嶼部を中心に中国貨幣の出土が知られており、対外交流の要衝であった歴史を持つ長崎県の特徴的な遺物の一つで

あるとも言えます。

このような弥生時代の遺跡から出土する中国貨幣は、貨幣として用いられたものではないと考える見方が主流を占めてきました。弥生時代の社会における交易は、現物取引を中心としたものであったとみられ、貨幣経済は認められないと考えられてきたためです。

ところが、近年になって、弥生時代の遺跡で出土する中国貨幣が、対価として支払いに用いられた場合があるとする学説が提唱されてきています。福岡大学の武末純一教授は日本列島と韓半島南部では、中国貨幣が大きな拠点となる集落遺跡より海村から出土する例が多いこと、海村では墳墓ではなく日常生活域から出土することから威信財ではなく日常的な活動の中で用いられたとし、交易の場で中国銭貨を対価として使用した可能性が高いと主張されていらっしゃいます。果たして、弥生時代に中国貨幣が貨幣として流通していたのでしょうか？大変興味深い研究であると思います。

長崎県埋蔵文化財センターが毎年、行っているシンポジウム。今回は福岡大学の武末純一先生、韓国・嶺南文化財研究院の権旭宅先生をお招きして、弥生時代に中国から渡ってきた貨幣は何のためにもたらされたのか、どのような役割があったのか、そして、貨幣として流通していたのかなどについて、当センターで行っている東アジア考古学研究成果を踏まえて、議論を深めたいと思います。

平成27年度 東アジア国際シンポジウム

「ロード・オブ・ザ・コイン — 弥生時代中国貨幣からみる交流 —」

【長崎会場】

日時 平成27年10月12日（月・祝）
14:00～16:30
場所 長崎歴史文化博物館ホール

【壱岐会場】

日時 平成27年11月14日（土）
14:00～15:30
場所 壱岐市立一支国博物館多目的ホール

【シンポジウム関連講座】

壱岐市立一支国博物館 特別講座
『鷹島海底沈没船はどこの船か？（古銭からの推定）』
日時 平成27年10月25日（日）
14:00～
場所 壱岐市立一支国博物館 多目的ホール

⇒詳しくは当センター HP のイベント情報で。